

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 8 日現在

機関番号：34506

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010～2012

課題番号：22652044

研究課題名（和文）異体系アクセント接触地域の学校における生徒の言語変化に関する社会言語学的調査研究

研究課題名（英文）Sociolinguistics investigation and research on language change of students in the schools of the areas where different accents contact

研究代表者

都染 直也 (TSUZOME NAOYA)

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：30179999

研究成果の概要（和文）：

これまでの日本語研究においては、一人の中で、母方言が標準語や他方言と接触した場合でも、アクセントは最も影響を受けにくいものであるとされてきた。しかし、学校現場という日常的な結びつきの強い場においてはアクセントも変わりやすい存在になっており、異なった体系が接触する地域においては、有力な方言の影響を受けやすいことがわかった。発生の記録はないが、おそらく数百年続いてきたアクセント体系が、方言接触の結果消滅の方向に進んでゆく可能性が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：

In old Japanese research, even when mother tongue (dialect) contacts the standard language or the other dialects in one person, it has been supposed that it is an accent what cannot be affected most easily. However, it turned out that the accent is also a changeable existence at the place where everyday connection called the school spot is strong, and it is easy to be subject to the influence of a leading dialect in the area where a different system contacts.

Although there was no record of generating, a possibility of the accent system which has probably continued for hundreds years having progressed towards disappearance as a result of dialect contact, and dying became clear.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	0	500,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,400,000	270,000	1,670,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、日本語学

キーワード：アクセント、社会言語学、言語変化

1. 研究開始当初の背景

(1) かつての日本語研究においては、一人の中で、母方言が標準語や他方言と接触した場合でも、アクセントは最も影響を受けにくいものであるとされてきた。しかし、テレビが日常生活から完全に切り離すことができなくなるとともに、その影響で標準語や他方言との接触が日常的になり、あらゆる面での言語変化が見られるようになった。アクセントもそれらの一つである。このことを実証するため、また、現在の動態、今後の動向を把握するために、内省が可能な、生育地および周辺地域方言について、これまで次のような研究を行ってきた(科学研究費関連)。

「兵庫県中播地方におけるアクセント変化の動向に関する調査研究(昭和 63 年度)」

「兵庫県中播地方におけるアクセント変化の動態に関する社会言語学的調査研究(平成 5 年度)」

「京阪式アクセント低起式音調の消失化に関する社会言語学的調査研究(平成 6・7 年度)」

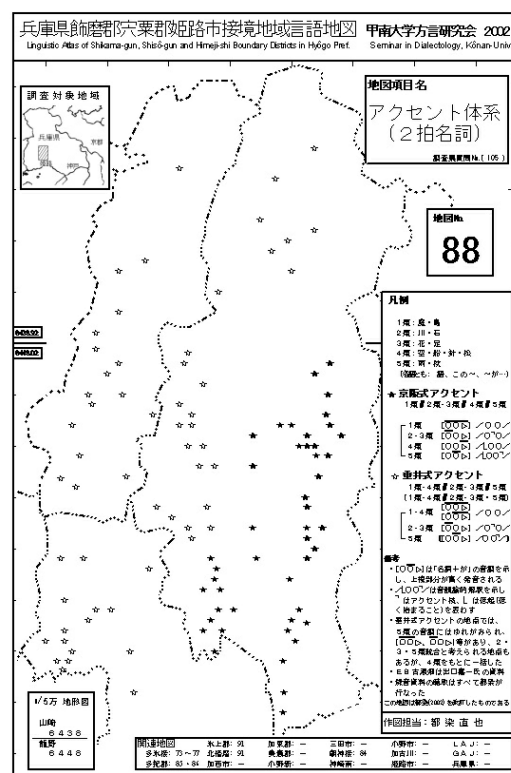
「兵庫県の異体系アクセント接触地域におけるアクセントの動態に関する社会言語学的研究(平成 13・14 年度)」

また、共通語がどのような形で方言に影響を与えるのか、その一例としての仮説検証として下記研究を行なった。

「京阪式アクセント話者における潜在的共通語アクセント顕在化に関する社会言語学的研究(平成 10・11 年度)」

(2) これらの研究を通して、特に関心を抱いたのは、学校という小規模共同体の中に、異なるアクセント体系を持つ児童・生徒が混在する場合があることである。具体的には、上記研究課題で扱った地域の中で、兵庫県飾磨郡夢前町(現・姫路市夢前町)には「京阪式ア

クセント」と「垂井式アクセント」が分布しており、夢前町の中学校 3 校のうち、2 校(鹿谷中学校、菅野中学校)は両アクセント地域を校区(学区)としている。したがって、生徒の中には、京阪式アクセント話者と垂井式アクセント話者が混在していることになる。いずれも小規模の学校で、教育実習訪問指導に赴いた際の感想も、生徒間の結びつきは緊密なものであった。



参考資料(夢前町におけるアクセント分布)

(3) 上記、平成 10・11 年度の研究では、母方言以外の標準語の影響(特にアクセントについて)が直ちに顕在化するのではなく、無意識のうちに蓄積され、或る機会に顕在化すること、その顕在化の有無・程度には個人差があることを明らかにした。

(4) 平成 18 年、夢前町が姫路市と合併し、生徒たちの活動範囲も大きくなり、垂井式アクセント地域の生徒が京阪式アクセント地域の生徒と接する機会がより増大すること

となった。

2. 研究の目的

研究開始当初の背景で述べたことをもとに、本研究では次のような目的を設定した(研究開始後の変更点を含む)。

(1)実態の把握：上記に参考資料(夢前町におけるアクセント分布)として示したものは、昭和初期生まれの男性話者資料に基づくものである。本研究での話者とは 70 年近い隔りがある。したがって、まず、基本的な資料から改めて収集し直しアクセントの実態を把握し、新たな言語変化分析の資料とすることが必要である。

(2)実態の分析：過去の研究成果から、高年層におけるアクセントの実態(アクセント体系・各アクセント型への所属語彙・アクセントのゆれ)については、その状況を把握している。若い世代における、今後の言語変化について分析・検証するためには、これら高年層の資料との比較を通して、まず、若い世代ではどのような変化が、すでに生じているのかを分析しておく必要がある。

(3)過去の資料との比較：実態分析で言及したように、夢前町における高年層については町内全域でのアクセント分布調査を行なった。但し、調査語彙が 10 語と少なく、基本的な語によるアクセント体系の把握にとどまっている。生徒の生育地と、その地点での高年層話者のアクセント体系を把握する際に利用する。その他、夢前町の南西に位置するたつの市揖西町(垂井式アクセント地域)での 1000 語程度のアクセント型調査資料がある。家島町方言についても 1000 語程度のアクセント型の記述的研究資料を作成しており、これらとの比較を通して、今後生ずるであろう言語変化(アクセント変化)について、どのようなものになりうるか、推定する。

なお、言語変化については、体系レベルから、

個別語におけるアクセント型の変化という語彙レベルのものまでがある。

(4)今後の研究に向けての準備：本研究で扱った課題は、個人においては 10 年程度、地域においては複数世代にまたがって生ずる言語変化であり、研究年度内での明確な成果が得られることは難しいことを踏まえている。したがって、今後継続して研究することにより、本研究での成果を活かすことができる。その準備として、将来的にも利用可能な形で資料作成することが必要である。

3. 研究の方法

「2. 研究の目的」に応じて次のように研究を実施する。

(1)実態の把握：研究開始当初は、姫路市夢前町を対象とされていたが、夢前町と同時に姫路市と合併した、飾磨郡家島町をも対象とすることにした。家島町は家島(真浦・宮)と坊勢島に古くからの集落があり、家島は京阪式アクセントに近いものであるが、これまで研究代表者によって、坊勢島は垂井式アクセントとも性格を異にする「京阪式アクセントに準ずる」アクセントであることが明らかになっている(1000 語程度の 3 世代による資料)。

これら、先行研究と同じ調査票(調査語彙)によって、比較可能な調査資料を得る。

(2)実態の分析：上述「実態の把握」で記したように、過去の資料と同じ方法・同じ項目を調査対象とすることで、実態分析の目的・方向性が自ずと定まってくる。分析に用いるアクセントの記号など、ワープロ専用機時代からワープロソフトへの変化に伴って若干の変更を加えるが、置換機能によって特に問題なく作業を行なうことができる。

(3)過去の資料との比較：本研究の成果として昭和 63 年度科学研究費の報告書として刊行した『兵庫県中播地方方言アクセント資料』の改訂版を作成し、紙媒体の資料集を電子フ

ファイル化することで、比較を容易にする。

(4)今後の研究に向けての準備：本研究の成果は、現時点における年層差を把握することによって、見かけの時間変化による言語変化を捉えることができる。しかしながら、「2. 目的」の同項目で記したように、時間を隔てての同一個人の再調査こそが、真の言語変化を捉えたものとなるはずである。機器面における将来的な変化については想像が難しい面があるが、機器的変化のたびごとに対応できる形で資料作成を進めておく。

4. 研究成果 研究計画時から、研究実施時における最も大きな状況変化は、夢前町の鹿谷中学校の生徒たちの母校が変更になったことである。すなわち、従来は垂井式アクセント地域にあった山ノ内小学校が、姫路市との合併により廃校となり(平成 22 年)、前之庄小学校と合併した。このことにより、夢前町山ノ内地区の児童は、小学校入学と同時に、京阪式アクセント地域である旧・前之庄小学校校区の児童と接触することになった。

これまでの鹿谷中学校では、言語形成期中とは言え、12歳の時点で、初めて「京阪式アクセント生徒」と「垂井式アクセント生徒」が接触することになった。

本研究での調査結果ではまだ垂井式アクセントとしての諸特徴(低起式・高起式区別の曖昧さ、「無い」のアクセント型など個別的事情)が観察されている。しかし、今後は小学校低学年という早い時点で京阪式アクセントと接触することになる。その結果、垂井式アクセントを習得する早い段階で京阪式アクセントと接触することになり、児童数・方言的威光など、さまざまな要因から垂井式アクセントを十分に習得することなく成長してゆくことになるはずである。

本研究では対象とすることができなかった菅野中学校では、かつての山ノ内小学校ほど地域性の高い状況ではないが、まだ小学校卒業まで垂井式アクセント地域、京阪式アクセント地域で過ごした生徒が在籍することから新たな研究対象校として考えている。

家島町の場合は、家島・坊勢島それぞれに中学校があり、両校卒業生が最初に出会うのは町内にある県立家島高等学校になる。しかし、同高等学校は小規模であり、近年は町外の本土からの通学生(高速艇利用)もあり、調査結果がそのまま活かせるかどうか、課題が残る。

本研究によって得られた成果というよりは、今後の研究に向けて明らかになった課題として、継続して調査を依頼できる複数の話者との出会いを挙げるができる。また、現在の生徒のみに意識を傾けすぎたが、地域に根付いた生活をしている成人をも対象として資料収集する必要があった。

具体的な言語資料ではないが、本研究においては、方言調査における調査方法についていくつか新しい試みを行なった。これまで、紙媒体での調査を行ない、電子資料を作成していたが、タブレット型コンピュータの軽量化・多様化(Android 機を含む)が進み、紙媒体を経ずに電子資料化する方法を試行してみた。大きくは、調査内容を手書きで入力・整理する方法と、表計算ソフトに直接入力してゆく方法である。前者は主として語彙・文法調査などの際に有効であるが、アクセント調査のように、調査聴き取り内容を単純な数字や記号で書き取ってゆく場合に極めて簡便なものであった。後者は、アクセント調査など、回答の範囲が限られており(閉じた体系)、単純な数字もしくはアルファベットの入力で済むような場合に有効であった。いずれの場合も、若干手を加えれば、調査終了と

ほぼ同時に分析に取りかかることができた。

5. 主な発表論文等

〔図書〕(計 1 件)

都染直也、私家版、兵庫県中播地方方言アクセント資料 改訂版、2013、63

6. 研究組織

(1) 研究代表者

都染 直也 (TSUZOME NAOYA)

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：30179999

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：